

古語に基づく地名の若干

松 尾 俊 郎

日本の地名を考証するにあたって、古語との関係に注意することは、極めて大切である。日本の地名には意味のわかりにくいものが多いことの主な原因の一つは、呼び名にしばしば勝手な漢字を当てていることである。従って眼からくる表記の文字にとらわれなくて、一応、耳できく音に注意することが必要なことは、地名研究の常識である。ことに古い時代に行なわれて、今は通常用いられなくなった古語は、一般の人には意味が通じなくなっているために、その当て字にぶつかると、一層、見当がつかなくなる。地名に取り組んで、私は日本の現地名に、古語からきたもの、古語からきたらしく思われるものが予想以上に多いことに思い当り、古語との関連を重視せざるを得ないのである。古語に基づく地名にしても、本来の正しい古語ではなく、しばしばそれが転訛し、その転訛した呼び名に当て字をしたために、なおさら解釈を困難にする。

地名は一方では盛んに変化する。しかしまた他方、長い間変らないで、古い時代の地名があちこちに残存し、地表に印せられた古い言葉として生きている。最近、各地で見る市町村などの地名変更のように、一般的に行政的地名は、人為性のために、時代的変遷が多いが、小さな地名コゴ—小字或はさらに小さい地名、岬・半島・崖・山・川その他、地形などに基づく地名には、古い時代から受けつがれたものが数多く見られ、それらは貴重な文化的遺産の意義をもつものとして留意すべきであろう。そうした古語地名とでもいうべき古語からきた（或はきたらしい）地名のうち、次に取りあげたものは、一般にはあまり注意されていないと思われるものの若干について論考したのである。（紙数の関係上、実例をあげることは、できるだけ制限した）

(1) コゴ（ゴゴ・コウゴ）

「こごし（凝し）」という古語は、「峻しい」とか、「岩がゴツゴツと重なって峻しい」、或は「凝り固まっている」などの形容詞で、「岩が根のこごしき山を越えかねて、^{*}巽にはなくとも、色に出でめやも」（万葉集301）その他、よく使われている。こうしたコゴのつく地名は、相当に多いようである。愛媛県松山市の沖にある興居島コゴシマ（松山市。旧温泉郡興居島村）は、まずこの例にあげうるであろう。今はゴゴシマであるが、従来、コゴシマとよませているものも多く、コゴがもとで、ゴゴはその転であろう。「興居」の字を当てているのを見てもそのことが推測される。この島は南北に長くて、四周に大小の湾がくいこみ、不規則な形をしている。全島が殆んど山や丘で、平地に乏しく、海岸は大部分、ゴツゴツの岩浜が連続する。島の南部を占める小富士（283 m、伊予富士と

もいい、島の最高峰)は、その名にふさわしい秀麗な円錐状を呈する。起伏に富む丘山に占められた、岩がちの島、すなわち「凝しき島」なるコゴ島に、興居の字が当てられたものであろう。

コウゴ島・コウゴ崎(皇后島・皇后崎)の地名もこの類と思われる。広島県福山市に属する^{トモ}鞆港とその前面の^{センスイ}仙酔島との間にある皇后島は、崖を回らす岩小島で、この例と見る。また長崎県対馬上島の北岸にある^{タケシキ}竹敷港(下県郡美津島町)の北岸に突出した岩ゴツの小岬「皇后崎」や、竹敷港のうしろの丘を越えた西側に、深く湾入した^{スエ}洲藻浦の中央に斗出した岩岬の皇后崎(美津島町)も同じ例に属する。五万分一地形図などにも名前のないような岩礁に「コーゴ」と呼ぶものがほうぼうにある。漁業者には暗礁・顕礁共に大切だから、その特徴によっていろいろの名称をつけている。兵庫県^{エジマ}家島群島(飾磨郡家島町)の^{シカマ}坊勢島の東湾内に、「北コーゴ」の小礁があり、この島の南西海岸の西方に「南コーゴ」の小礁がある。(家島漁業協同組合漁業権図による。)こうした例は他に幾らもある。

福島県の南東隅、旧^ナ勿来市^{コゴツラ}九面(また九浦とも)の小漁村などもこの例に適する地形である。平潟港の北西に隣るこの地は、すぐ北の勿来関跡を含む丘陵が、峻しく海に迫り、僅かに陸前浜街道の通ずる山すそを、^{フチヨウコトバ}海蝕崖の縁どる磯浜である。^{フチヨウコトバ}符帳詞(符帳語)に、「九」を「際」または「崖」の意とするというが、^{コゴ}九を崖の意とするのは、コゴシからきたのかもしれない。大分県日田市に属する古々路(日田市の南西境)は、県境の急な山地を越えて、福岡県浮羽郡へ入る峠道の小部落、また吾々路(大分県日田郡大山村)は、日田市から南方へ通ずる峻しい山道に沿った小部落で、いずれも岩坂の道にちなむ名かと思われる。^{コゴ}古後・古古などの地名にも、この例があろうと思う。

カゴ・カゴのつく地名、例えば^{カゴ}籠坂・^{カゴ}加古坂・籠山・籠岩・籠原・籠瀬・鹿兎山・鹿籠などのカゴ・カゴは、ここにいうコゴからきたものが多いのではなかろうか。このことの一証左となると思われるのは、宮城・青森両県境の船形山(また御所山、1,500m)の頂上からすぐ西方にある「仙台カゴ」及び「最上カゴ」の二つの断崖峯である。前者は県境、後者はそのすぐ北西の山形県側にある。このカゴは岩・岩壁を意味すると見なされよう。富士山東麓の山中湖の南にある籠坂峠(また加古坂・鹿兎坂)は、駿河・甲斐の国境にあって、旧鎌倉街道の通路に当り、頂上付近は崖地が続いている。

籠山とよばれる岩山も少なくない。秋田県北秋田郡^{カミアニ}上阿仁村にあるカゴ山(516m、籠山に同じ)は、小阿仁川(米代川支流)の上流左岸にあり、峡谷に向って急下するこの山の斜面は、一面の岩崖である。この峡谷部に^{ハギナリ}萩形ダムが建設されている。東京都西多摩郡奥多摩町^{ニツバラ}日原の日原鍾乳洞のすぐ上流にあるカゴ岩は、そばだつ断崖の岩山である。福島県安達太良山(1,700m)の山頂のすぐ北東の一峰に籠山(1,640m)がある。籠山とよばれる山には、金鉾などを掘った跡の坑道が縦横に通じて、内部があだかも竹籠のようだというので付けられたと伝えるものもある。(例、山形・宮城県境の^{トウガツタ}蔵王山(1,841m)東麓の遠刈田温泉の付近にある籠山——本名、岩崎山)。これなども岩山をさす「カゴ山」という名に、もっともらしい説明がついたものであろう。長野県西境の針ノ木峠(2,541m)の北側から発源して、北から東へと流れる籠川の深い谷なども、コゴの一例であ

ろう。

クゴ(グゴ)(供御)という語がある。飲食物の敬称で、主として天皇の飲食物にいい、なお上皇・皇后・皇子などについてもいった。それが変じて、女房言葉として飯、その他、飲食物をいうことにもなり、後には神社などへの供御にも使われた。クゴが転じてコゴともなった。そこで食物のコゴは、これまで述べた岩に関係したコゴと、場合によっては混同することも考えられる。近江の瀬田川の^{クゴ}供御ノ瀬は「コゴノセ」ともいい、朝廷に奉る^{ヒツオ}氷魚(ヒオ、鮎の稚魚)の漁場として知られ、延喜式その他に載せられている。この瀬は瀬田川左岸の黒津(大津市黒津町。東から^{ズイト}大戸川が合流するあたり)の所で川幅が狭まり、浅瀬をなして古くから瀬田川の徒涉地点として注目された。この瀬に昔は八箇の岩があって、室の^{ムロ}八島(また黒津八島)とよばれた。元禄年中、河村瑞賢がこれらの岩を除去して、水運を利したという。最近、ここに琵琶湖の水位調節を計る^{ナンゴウアライゼキ}南郷洗堰が完成した(昭和37年)。

このコゴノセ(グゴノセ)が朝廷への氷魚の供御所であったことは確かだとしても、多くの岩の並ぶ「岩の瀬」をよぶ「コゴノセ」の名が既にある、そこが川幅の狭い早瀬をなして、ちょうど供御の網代に好適の地点でもあって、コゴノセと供御の瀬が重なったという解釈も可能のように思われる。こうした瀬が籠瀬で、岩の多い原が籠原であろう。

(2) ^{カシワ} 柏 崎・柏 島

柏を冠した地名は、種類も数も相当にたくさんあり、柏崎・柏島・柏・柏木・柏原・柏木山・柏野・柏坂・柏峠・柏倉・柏窪・^{カシハラ}柏原、そのほかいろいろ見られる。柏(榊)の葉は広くて堅いので、上古、食を盛るのに用いられ、やがて、それに類した葉をもつ他の木にもこの名が使用されるようになって、こうした樹葉の総称ともなった。柏のつく地名の多いのも、うなずけるわけである。従って柏地名には文字通り、樹木の名に基づくものがたくさんあることは事実である。ところで、柏崎とよぶ小さな岬や柏島など海に関係した場所の柏地名を多く調べてゆくうちに、それらが岩石の著しい所、或は断崖の場合が多いことに気づいた。岬や小島には、そうしたものが多いとはいえ、柏のつくのには、それが特に目立つのである。そのうち古語としてのカシワには、^{カシ}巖・石の意のあることを知った。すなわち、カシワは「^{カシ}堅し^{イワ}磐」のつまったもので、巖や石をいうのである。この意味のカシワに対して、古書には柏の字を用いているものも見られる。カシワの葉もまた「堅し葉」の約という。柏が岩とか石の意をさすらしい数例をあげる。長崎県五島列島の中通島の西岸、上五島町の湾内の柏島は、表面の起伏はなだらかであるが、周囲は高い断崖と岩浜を回らしている。長崎県東松浦半島の北岸、^{シサ}志佐港(東松浦郡松浦町)の東を限る柏崎は、岩ばかりの小岬である。同じく東松浦半島の北東岸の^{カシワ}神集島(唐津湾の出口、唐津市)は、柏島がもとで、神集は当て字であり、神集をカシユウとよんで、音が似ているので、カシワに当てたのであろう。島はほぼ傾斜がなだらかであるが、周辺は急崖と岩礁が取りまく。また高知県の南西端にある柏島(幡^{タタ}多郡大月町。島の北東岸に柏島漁港)は、野中兼山の築堤の事績で知られているが、殆んど全島が島山(145m)をなし、南岸に断崖が連なっている。

東部日本の若干の例をひろうと、伊豆の伊東温泉から西へ向う山越えの旧道が、伊東市と田方郡との境界を越える地点に柏峠(420m)があり、相当に峻しい峠道である。また甲府市から南方へ進んで御坂山地の北西部を越える峠道の柏坂(また柏尾坂, 853m, 右左口峠のすぐ西)も、頂上付近のほかは、おおむね険路で、岩崖なども多い。新潟県北東部の断崖海岸の景勝地、海府浦にある柏尾(柏に同じ、村上市)なども、この例にあげられよう。山形県を流れる最上川が、奥羽山脉を横断する峡谷部の右岸にある柏沢部落(山形県最上郡戸沢村)とこれに隣接する柏谷部落(飽海郡松山町)の両部落は、峻険な山脚と河岸の間の、狭小な余地に立地し、付近に懸崖絶壁や多くの滝を配して、峡谷美をそえる所である。柏谷は恐らく柏の変形で、両者を区別するために字をかえたものと思われる。両部落は狭い場所で接続しながら、郡を異にし、また羽前・羽後の国境をはさんでいたのである。柏地名の一々に触れる余白がないので、この項の終りに、新潟県柏崎市について一言したい。

新潟県の日本海沿岸にある柏崎市の市街は、北陸街道の通ずる低い砂丘の上と、その内側の低湿地とにひろがっている。市街の西端は、丘陵が海に迫っているので、市街中心部の前面の滑らかな砂丘海岸が、ここで一変して、岩礁の群がる岩浜に移る。この市街の西端が柏崎の岬町で、そこに一つの岩岬が海岸線と直角に、500メートルばかり、グーツと力強くといいたいように、海へ突出して、柏崎海岸に大きな変化を齎らしている。岬町の名はこの岬の存在によることはいまでもない。この岬は海蝕による平坦な表面(高い面で約50m)をもち、周囲の崖下には、岩礁群が付随する。岬の突端に近く番神堂(三十番神堂、僧日蓮にゆかりの地と伝える)が立つので、ここを番神鼻といい、近郷の参詣者の集まる所、眺望も遠く開けて、佐渡や能登の山並も望見され、土地の名所となっている。この岬は船人たちの好目標となり、その東側は北西風による風波の際の避難場所にも役立った。広がった地域以前の、旧来の柏崎は、この岬のほかは、他に全く岬角をもたないことから、柏崎なる岬地名は、しぜん、この番神岬に結びつき、しかも柏を岩根の意に解すれば、柏崎すなわち「岩岬」と見なし得るのではあるまいか。今では番神堂の沖合2里あたりの所に、かつて大樹があったので、この地を柏崎という、今もその根株が海底に見られるというのは(柏崎旧記)、柏崎の地名がさきにあって、それに付会した説明であろう。土地の陥没があつて、海底に樹根の発見される所は、富山湾岸その他、あちこちにあるとしても、それを今の地名に結びつけるのは、年代的に無理であろう。現在、この岬あたりに、昔栄えた柏樹の確かな遺跡でもあれば、話は別であるが、さもない限り、私は「岩の岬」の解釈に傾くのである。

(3) アズ・アス (坍・崩崖)

アズ・アスは「崖の崩れやすいような所」をいう古語で、新撰字鏡や天治字鏡などの古い字書には、坍の字を当て、崩岸の意としている。坍は「崩れ岸」に当てた日本の造字であろう。坍のほか、「阿須」の字も当てられ、地名にも阿須・阿須川など、阿須のつくものが相当にあり、また明・アズ・アスのつくものもある。アズはまたアゾともいい、山岳語としても用いられ、谷筋が崩れて岩などが堆積しているような所をいう。「崩岸の上に駒を繋ぎて危かど、人妻子ろをいきに我がする」<万葉

集3539〉などのように、古くはよく使われたのである。崩岸をさす阿須の一好例は、埼玉県飯能市阿須（旧入間郡加治村大字阿須。市の南部で、入間川右岸）であろう。新編武蔵風土記稿には、入間川の洪水によって土砂が崩れ、「阿須ヶ崖」という数十丈の崖をつくった旨を記している。長崎県^{シモアガタ イズハラ}下県郡厳原町阿須（対馬の上島東岸）は、厳原港のすぐ北側に、深く湾入した阿須湾（阿須浦）に臨み、山すそが崖をつくって湾岸に終わっている。この湾岸には海女で有名な曲の海村もある。琵琶湖の西岸に注ぐ^{アヅ}安曇川は、湖西では最も大きい川で、湖岸に著しく張り出したテルタをつくっている。下流は安曇川町（滋賀県高島郡。旧安曇町）がある。安曇はアトのほか、アズ（アツ）・アトともよばれ、古くは阿戸・安土・足利などとも書かれているが、いずれも当て字である。比良山地と丹波高原との間の峻しい断層谷を北流し、やがて流路を東へ転じて湖西平野に入る。上・中流の兩岸に断崖の多い川である。このアズ川も恐らくここに述べる「アズ」の一例に入りうるであろう。この川の支流に^{アソ}麻生川（高島郡朽木村を西から東へ流れる）があり、兩岸の急な谷で、麻生の部落もそうした谷合いの小部落である。この地名なども麻の栽培地（アソウとよむことが多い）の意ではなくて、ここにいうアソ・アソの類ではないか。折々こうした地形にある阿曾原・阿蘇などの地名も同様であろう。^{アズレ}崩沢という地名（例、長野県木崎湖の北岸付近の崩沢。大町市）などは、この意を表わすのである。

アズ（アス）に関連して触れたいのは「^{アズキ}小豆」のつく地名である。小豆沢もあれば、小豆坂・小豆島・小豆畑などもある。これら小豆地名のすべてを、そのまま豆類の小豆にとるのは、何としても不自然で納得がゆかない。ところで、小豆沢を「アズサワ」とよませている地名も散見し、しかもこれら地名の実例を当て見ると、崖とよく結びつくようである。東京都板橋区^{アズサワ}小豆沢町（旧豊島区志村大字小豆沢）は、アズキサワではなくてアズサワである。この地は中山道の旧板橋宿の少し北の辺で、高度20mほどの台地の北端が、崖に縁どられてほぼ東西に走り、その北側はかつて崖下に迫った荒川の旧河道をこえて、一面に広がる低湿地をなし、付近に^{ウキ}浮間ヶ原の名があるが、この浮間（東京都北区浮間町）の地名は、そのまま低湿地を表現している。この崖線に沿って古寺の竜福寺その他の寺社が並んでいる。アズサワの地名は竜福寺付近を通る崖岸に基づくものではあるまいか。前記の浮間のウキは、「泥深い地」をいう古語で、「ウキヒジ」（浮泥）もこれと同じである。浮間の間は、ここでは「場所」の意であろう。泥沼のことを^{ウキヌ}「浮沼」ともいう。浮・^{ウキヒ}浮泥・浮田（宇喜田）・浮沼・浮津・浮島など、浮のつく地名は相当に多い。

茨城県の北東部にある北茨城市^{ヘナカワ アズヘ}華川町小豆畑も、小豆をアズとよんでいる例である。ここは磯原で海に注ぐ大北川の支流、花園川の中流の狭い谷にある部落で、常盤炭田の一炭山でもある。地形から見て、この地名も崖にちなむアズ地名に属するものと思われる。このハタ（畑）は恐らく端ととるべきであろう。何畑の畑は耕地ではなくて、端・へりの当て字であることがよくある。海岸べりの岩礁が畑島の名をもつことも珍らしくない。小豆の地名が「厚木」と書かれることもある。例えば愛知県岡崎市羽根町（岡崎市南郊、東海道本線岡崎駅付近）の小豆坂（天文年中、織田信秀・今川義元の古戦場）は、また厚木坂とも書かれた。神奈川県厚木市の場合も、これと同類であるかどうかは、はっきりしない。

岐阜県の北端付近、富山県との境に近い小豆沢（岐阜県^{アズキ}吉城郡^{ヨシキ}宮川村）は、宮川（神通川上流）の峡谷にある部落で、この峡谷を通ずる越中街道に沿い、急峻な谷壁にはさまれた立地環境は、崖地にちなむアズの名に適合すると思われる。また秋田県の北東部、鹿角郡^{カヅノ}八幡平村^{ハチマンタイ}小豆沢（花輪町南方）は、花輪線の通ずる鹿角街道に沿い、五ノ宮岳（1,115m）西麓の扇状地末端の集落であり、扇状地末端が水田地に急斜する地形的条件が、この地名の由来に合致すると見なしうる。

以上の諸例から見ても、アズとアズキは同じ言葉のように受けとれ、アズが生活に身近な食料のアズキに転じ、それに小豆の字が当てられたものではあるまいか。つまりアズとアズキは同義語で、共に豆類の小豆とは関係のない地形語の場合が、ふつうのように思う。さて、そこでこの項の終りに、瀬戸内海の大島、小豆島^{シヨウド}について言及したい。

瀬戸内海の島々のうち、淡路島に次いで大きい小豆島^{シヨウヒ}（香川県小豆郡）は、もとは「アズキシマ」とよばれ上代からこの名で知られている。ショウドシマとよぶようになったのは、小豆郡（公的にはショウズで、ふつうショウドともいう）が設けられた以後（明治13年にこの郡新設）のことであろう。この郡名は小豆島の小豆を音読みにしたのであろう。ところで、このアズキシマのアズキも崖にちなむ名称であろうか。こういう大きな地名になると、判断に躊躇せざるを得ないが、敢えてこの島第一の景勝である寒霞溪^{カンカケイ}を持ち出すことにする。この島は海岸にも内部にも、崖地の多い所であるが、中でも島の中央よりやや東寄りであって、断崖の谷と怪岩奇峯の交錯する寒霞溪の地形は、早くから人の目を引き、カンカケの名でよばれて、鍵掛（鈎掛）・神懸・神駆などの字が当てられた。寒霞溪（徳富蘇峰の命名とか）を含めて、これらの地名の所では、峻しいので鈎^{カギ}を掛けて登ったと言いつたといわれているが、恐らく文字からきた付会であろう。峻しい峠や崖地にはよく鍵掛峠や鍵掛の地名を見うける。カンカケ・ガンカケ・ガッカケなどは、崩れた崖や絶壁をいう言葉で、今でもかなり広く用いられている。鍵掛の地名をカギカケ・カイカケとよぶ所もある。

以上のアズ・アスとちがって、アスという語には川・海などの浅くなる意味もある。源実朝の「山は裂け、海はあせなむ世なりとも」の歌の「あせ」である。このアスには浅^アを当て「浅す」とよませている。霞が浦の出口あたりから、利根川の川口付近にかけて、古く入江のかたちをなした「安是湖（アゼノウミ）」はアセタ海の意である。対馬の上島と下島の間にある浅海湾^{アソウ}（浅茅湾。真珠養殖が盛）もこの例であろう。和歌山県有田川上流の阿瀬川や、青森県津軽平野の黒石市のあたりを西流する浅瀬石川^{アセイシ}（黒石市東郊の浅瀬石はこの川の左岸）は、この辺で広い氾濫原を乱流し、この名の一適例であろう。浅瀬石は浅石・汗石などとも書かれた。あちこちにある浅川（朝川も同じ）は、正に文字通りである。この崩崖をいうアズ・アスと、土砂が堆積して川・海などの浅くなるアズ・アスとは、語源的にはつながるものではないか。崩岸や崩崖がその下に土石の堆積面を作ることに主体が移れば、そうした堆積地形をいう名称になるのではないか。それらについては、なお実証的に考究したいが、ここには省く。

(4) 醒井^{サメ}（醒ヶ井^{ガイ}）

滋賀県坂田郡米原町^{マイハラ}醒井（旧醒井村）は、県の北東部、東海道本線の沿線で、かつては中山道の

宿駅として賑わったが、今は振わず、いろいろと古駅のすがたを残した静かな町並である。北東——南西方向の細長い町筋の中央を幅2メートル内外の溝川が通り、清流が勢よく流れている。その水源は町屋の東端付近の加茂神社の崖下に湧く豊富な泉である。崖の上を最近、名神高速道路が通じている。この泉は日本武尊の「居寝の清水」として有名で、居寝は寢覚と同じである。尊が伊吹山で毒霧にあてられたのが、この霊泉に浸って、悪夢から覚めたように爽快に復されたと伝えられ、醒井の地名は、この故事にちなむとされている。東関紀行その他の紀行文や歌などにも出てくる泉で、幾つかの水口から、ボクボクと音を立てて湧き出る水は、早魑にも涸れることがない。昔は泉のほとりに樹林が多く、水量ももっと豊富であったというが、とにかく、醒井の地名と伝説にふさわしい名泉である。

水が騒しく音を立てること、サザッと流れる、サラサラ流れること、また、風がサッと吹くこと、或は人や鳥などの騒ぐことなどを表現するのに、古くから「さめく」ということばがある。さめくが「ざめく」となり、転じて「ぞめく」ともなり、更に「ひさめく」とか「さざめく」などへも移る。フツフツと音を立てて湧き、ソウソウと流れる醒井の泉のほとりに立つと、「さめく」ということばが、実感的にぴったりとくる。サメガ井の名は、サメク井に基づくものであらうと思う。すなわち、音響からきた地名、音響地名の一つと見なすのである。

水などの勢よく流れるさま、或はサラサラ流れるさまをいうのに、「ささ(さざ)」という語もある。また「ささ(さざ)」には小さい(また細かい)ことを表わす意(接頭語)もある。ささ(さざ)波など、その例である。ところで、笹川という川は方々にある。字のままに「岸辺に笹の生えた川」と解しやすいが、実際は恐らく音響地名か、或は「小さい川」の場合がふつうではないかと思う。新潟県の北東部、断崖海岸の名勝「海府浦」にある「笹川流」の笹川(海岸の笹川部落で海に注ぐ峻しい山地の川)などは、音による名称であらう。ササ川には篠川・佐佐川と書くものもある。醒川や鮫川の川名もあり、福島県の南東部、阿武隈山地から流れ出て旧勿来市で海に注ぐ鮫川が醒川とも書かれたように、醒と鮫とが互に混用されるのは、共に当て字にすぎないからである。東京の旧四谷区にあった鮫が橋(旧赤坂区との境の辺、旧赤坂離宮の北西)は、付近の崖下を流れる溝川の橋であったが、このあたりの地名ともなった。この地名について、江戸名所図会などには、この地がかつて海に続く谷で、鮫がすんでいたので、この名があると、言い伝える旨を記している。また東京品川区の海岸の鮫洲(今、品川区大井鮫洲町あり)は、砂洲の形が三角形をなし、それが鮫の頭の三角形と相似するための名であるという説もあり、これらは鮫の字にこだわる解釈である。また一説には、この海岸に泉があり、真水のことをいう「さみず(素水)」からこの鮫洲が出たという。東海道中膝栗毛の品川のくだりに、弥次郎兵衛が「海辺をばなどしな川といふやらん」と難じた上の句に、北八、とりあえず「さればさみづのあるにまかせて」(鮫洲にかける)と下の句をつけている。そこに、鮫洲の地名の起りに該当する泉(ここにいうサミズ)が果してあったかどうか知らないが、あったとすればサミズはシミズ(清水)の訛りであらう。サメズはサミズ(シミズ)の転訛として、一応の説明がつくとしても、他のいろいろの鮫地名とは適合し難い。鮫洲のサメもやはり水の音で、浅瀬の潮騒によるのではなからうか。

静岡県の駿河湾北岸にある鮫島集落（佐女島とも書いた。旧田子浦村。富士市）は、いわゆる田子ノ浦の砂丘海岸に位置し、うしろに低湿地をひかえた砂丘のへりにある。海岸ゆえ鮫の魚獲と無縁ではないとしても、まず波の音に明け暮れる土地柄を表わす地名と見るのが自然であろう。青森県鮫港（八戸市鮫地区）は、鮫の地名ではよく知られ、今、八戸港として大規模の魚市場などがある。この鮫地区の東側に突出する半島を鮫崎（または鮫角^{サメカド}）といい、鋸歯状にきざまれた段丘海岸に、数多の岩礁が伴ない、ウミネコの^{カフ}蕪島もそこにある。鮫のつくこの地の名称は魚ではなくて、波の響のように私には思える。

滋賀県犬上郡多賀町^{サメ}佐目は、彦根市南郊を流れて琵琶湖に入る犬上川の上流が、鈴鹿山脈の西斜面にうがつ峡谷の、わずかな段丘面にある部落で、びょうぶを引き回したような山脚を縫って、一条の峡流と峠道を通ずる。ここも川瀬の音と、佐目の地名とがよく結びつく環境である。

(1960. 1. 15)

この報文を大森五郎先生の還暦を祝して謹呈したい。